

## 帰化植物雑感 - 3

# 三条市のハチミツソウ

高橋 務

1994年4月に、再び三条市内へ通勤することになった。三条市には、以前、勤務先があって長い間通っていたが、勤務先が代わってからは訪れる機会がなかった。

久しぶりの再訪に、ちょっとした楽しみがあった。というのは、かつて、三条市の五十嵐川の堤防で採集した帰化植物が、その後、どのようになっているか、尋ねてみたかったからである。

1967年秋、三条市五十嵐川の河岸植物の調査をしている時に、市街地内の左岸堤防上の道端で見慣れない植物を採集した。

草丈は約50cmで上部は分岐しており、葉は皮針形で表面は粗面でざらつき、柄はなく葉の縁が茎に翼となって垂下している。花は終わっていて、周囲に翼のある果実が球状に集まっていた。形態的に著しい特徴があるが、手元にある植物図鑑ではその特徴を持った種は見出されず、日頃、植物を同定して頂いている岩野俊逸先生の助言で、種名不明のまま、国立科学博物館のおし葉展（1968）に出品した。

出品目録には、「*Verbesina alternifolia* Britt.」と記載された（第32回おし葉展出目録、1968）。

後日、和名がなかったので、問い合わせたところ、似た種に、第28回おし葉展（1964）に久内清孝博士が出品された「*V. occidentalis* (L.) Walter、ハチミツソウ」があるが、*V. alternifolia* には、いまのところ和名はない、先の標本は不完全なので、花の着いている良い標本を送るようにと、奥山春季先生から返信を頂いた。

次の年には、春から生育や分布状態をみたが、堤防斜面の狭い範囲に、少数の個体が生育し、草丈120cm位に成長し、8月下旬から9月に少数の黄色の舌状花と多数の筒状花よりなる花を着けることがわかった。



前年に採集したものは、草刈り後に生育した個体の不完全な標本だったので、開花している完全な標本を作製し、再び、同定を依頼したところ、久内博士の「*V. occidentalis* (L.) Walter、ハチミツソウ」と同一のものと同定、*V. alternifolia* を訂正する、と返信を頂いた。

当時、手元にある文献では、杉本順一著：日本草本植物総検索誌、双子葉篇（1965）に「*V. occidentalis* (L.) Walter、ハチミツソウ栽（名古屋）」と記載があり、形態的な特徴の記載がないが、かくして三条市産の帰化植物の学名と和名を知ることができた。

ところが、1977年に、村田 源先生が、岡山県倉敷産の帰化植物を *Verbesina alternifolia* (L.) Britt. と同定、ハネミギク（新称）と命名された（植物分類地理、28:44、1977）ので、三条市産の帰化植物の学名と和名が疑問となった。

その疑問が解決したのは、1980年に、浅井康宏先生が久内先生の扱われたものは *V. occidentalis* ではなく、*V. alternifolia* であること、和名としては、ハネミギクが形態的特徴を表している名であるが、蜜源植物に因んだハチミツソウを使うのも一法であろう（植物研究雑誌、55:202、1980）と記されたことによる。<sup>7)</sup>

三条市の帰化植物は、学名は、最初に同定された *Verbesina alternifolia* (L.) Britt. 和名は、ハネミギク、別名、ハチミツソウと確定した。

次に、同種の採集記録と種名について、これまでに入手することのできた文献で変遷をたどってみた。

- (1) 1960年頃、北海道農業試験場畜産部、関口喜一氏、蜜源植物として導入。  
『キンミツソウ』という名で種子配布。<sup>6)</sup>
- (2) 1961年 名古屋の養蜂家、井上丹治氏、蜜源植物として北米より輸入栽培。<sup>1)</sup>
- (3) 1963年 久内清孝博士、(2) に *V. occidentalis* (L.) Walter、『ハチミツソウ』と命名。<sup>2)</sup>
- (4) 1965年 杉本順一著：日本草本植物総検索誌、双子葉篇に「*V. occidentalis* (L.) Walter、ハチミツソウ 栽（名古屋）」記載。<sup>3)</sup>
- (5) 1967年 三条市五十嵐川河岸で同種採集。
- (6) 1968年 (5) を *V. alternifolia* と同定された。<sup>4)</sup>
- (7) 1972年 長野産の標本（佐藤邦雄採集）に原 寛博士が、*V. alternifolia* と同定。<sup>7)</sup>
- (8) 1975年 森田弘彦氏、北海道札幌市月寒で野生化した同種を採集。<sup>5)</sup>

- (9) 1976年 大久保一治氏、岡山県倉敷で同種採集。<sup>5)</sup>
- (10) 1977年 森田弘彦氏、(8) 北海道札幌市月寒で採集したものを *Actinomeris squarrosa* Nutt. 『キンミツソウ』と発表。<sup>8)</sup>
- (11) 1977年 村田 源氏、(9) 岡山県倉敷産の標本を、*V. alternifolia* と同定、「ハネミギク」と命名。(8) 北海道月寒の標本も同種とした。<sup>5)</sup>
- (12) 1980年 森田弘彦氏、(11) でハネミギクと和名を与えられた *V. alternifolia* Britt. の和名に「キンミツソウ」(関口喜一氏命名)を用いる。<sup>8)</sup>
- (13) 1980年 浅井康宏先生が、(3) 久内先生の扱われた *V. occidentalis* は、*V. alternifolia* であり、和名としては、ハチミツソウを使われた。<sup>7)</sup>

帰化植物は、渡来した時期などはっきりしないものが多いが、ハチミツソウは、蜜源植物として、ほぼ同時期に、北海道と名古屋で、人為的に持ち込まれたものであり、その上、各地の養蜂業者に頒布されたという。

浅井先生は、1980年に“約20年近く経て、各地で帰化状態が認められ、結果率、発芽率が良好で多年草であることから、各地に広布、定着し、ごく普通の帰化植物として君臨するのも時間の問題”<sup>7)</sup>と書かれており、現在、関東地方以西の荒地に散在的に帰化している<sup>10)</sup>という。

ところで、三条市のハチミツソウも、人為的に持ち込まれたものであろう。しかし、三条市には養蜂業者はないので、養蜂用の蜜源として持ち込まれたとは思われず、誰が、どのような目的で、何処からか、とあれこれ疑問が生じる。

現在の生育状態は、堤防外の斜面に数本から十数本の茎が株立ちし、草丈は150cmくらいになるが、株間は開いていて在来の種が入り交じっている。約30年間に堤防斜面に長さ約200mの間に広まっている。

五十嵐川河岸に、ほぼ同じ頃に、侵入したセイタカアワダチソウは、爆発的に増殖し他の種を駆逐し密生するようになったが、ハチミツソウはこれまでの生育範囲の広がりをもみても、河岸の植生を急激に変化させるような増殖はないと思われる。

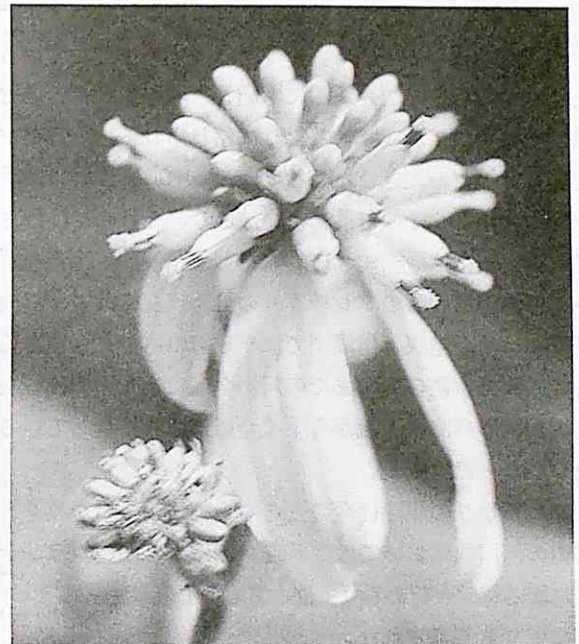
一般に、帰化植物は、オオイヌノフグリなど二三の種を除けば可愛げがないし、侵入の時期や方法が不明で、増殖と伝播はたくましく、在来種を駆逐したり、自然植生を乱して、見慣れた風景を替え、嫌われるものが多い。日本から外国に帰化した植物でも同じ様なことがいわれるようである。クズやスイカズラなど、帰化した先で最悪の帰化植物と嫌われているという。

嫌われものの帰化植物ではあるが、自然の植生を一木一草根こそぎ剥ぎ取ったり、埋めたりした劣悪な環境に、いち早く侵入して、緑を回復する先駆者として、健気に生きるものとしてみると、一概に嫌いと言うことはできない。

日本から外国に帰化して嫌われるクズやスイカズラが、日本では秋の七草とか花の形や香りが好まれていることをみれば、日本に渡来し嫌われている帰化植物も、原産地では、また違った姿をしているのではなかろうか。

いつか、帰化植物の故郷を尋ねて、原産地の自然環境のなかでどんな生活をし、その地の動植物と関わりあい、どんな風土・景観を形づくっているであろうか、自分の目で見てみたいものと思っている。

尾崎富衛氏よりこの小文を書くのに用いたハチミツソウに関する文献を早くに頂いていた。ここに厚く御礼申し上げます。(1998年10月30日 記)



#### <引用文献>

- 1) 久内 清孝 (1963): 外来植物を記録する、植物研究雑誌、38巻 12号: 375頁
- 2) 国立博物館 (1964): 第28回おしぼり展出品目録
- 3) 杉本 順一 (1965): 日本草本植物総検索誌双子葉編
- 4) 国立博物館 (1968): 第32回おしぼり展出品目録
- 5) 村田 源 (1977): 新しい帰化植物ハネミギク(新称)、植物分類地理28巻 1~3号: 44頁
- 6) 村田 源 (1977): ハネミギク追記、植物分類地理28巻 4~6号: 110頁
- 7) 浅井 康宏 (1980): キク科の帰化植物ハチミツソウ追記、植物研究雑誌、55巻 7号: 10-11頁
- 8) 森田 弘彦 (1980): 札幌周辺の帰化植物(1)、レポート日本の植物、6: 52頁
- 9) 高橋 務 (1980): 三条市の帰化植物、新潟県生物教育研究会誌、15号: 21~22頁
- 10) 浅井 康宏 (1997): 帰化植物のニューフェイス、日本野生植物館: 37頁